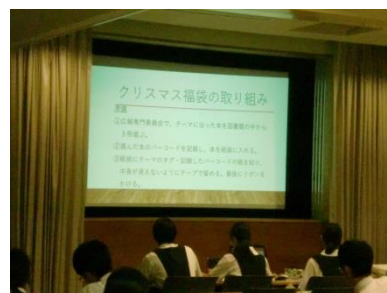


＊ 毎月23日は「福岡市 子どもと本の日」です

福岡市中学校生徒図書委員交流会

第61回福岡市中学校生徒図書委員交流会が、8月8日（木）あいれふで行われました。この交流会は、福岡市立中学校の図書委員会の生徒が学校の図書館紹介や図書委員会の活動についての意見交換をして、今後の活動に生かすものです。

はじめに、席田中学校の図書館紹介がありました。図書館からの情報発信として、月間の貸出冊数ランキングやお薦め本の紹介などを掲載した図書館だよりを各クラスに配布していることや、本に親しむ機会づくりと読書の幅を広げ新たな知識を得るきっかけにするための「クリスマス福袋」という取組などを紹介していました。図書館の魅力を一人でも多くの生徒に知ってもらおうと頑張っている姿がよく分かりました。



（「クリスマス福袋」の取り組み紹介）

次は、5つの中学校が出場したビブリオバトル\*でした。出場者は、自分が薦める本を手を持ちたり、本に関係することを紙に書いたりして、本のおもしろさやすばらしさを一生懸命紹介していました。紹介後は、「本にはどんな分類ラベルを貼りたいですか。」「本の中でどんな言葉が気に入りましたか。」などいろいろな質問が、中学生だけでなく引率してきた先生や学校司書からもありました。お薦め本をみんなに読んでほしいという気持ちがとても伝わってきました。今年のチャンプ本は、「それからはスープのことばかり考えて暮らした」（吉田篤弘著，中央公論新社）でした。



（出場者の紹介）



（チョコレートと読む漢字を紹介）



（本を見せながら紹介）



（メモをとる中学生）



（熱心に聞く先生方）



（中学生から出場者への質問）



※出場者がそれぞれ推薦する一冊を持ち寄り、その本のよさについて5分程度で紹介し、その後、参加者がどの本を一番読みたくなったかを多数決で決める書評イベントです。知的書評合戦ともいわれます。

最後は1グループ6人程度に分かれての情報交換会でした。交換会では、図書館の来館者や本の貸出冊数を増やすため、図書館祭りなどのイベントを実施したりお薦め本を選挙で選んだりしていること、図書館からの情報発信としてPOPでのお薦め本や新刊本の紹介、給食時間に放送委員会に新刊本紹介の放送をしてもらっているなど、いろいろな取組がありました。その後、グループで情報交換した内容を紙に書き、全体発表をして交換会を終わりました。どの図書委員も、少しでも本の貸出冊数を増やし、みんなが使いやすい図書館にするために、本の紹介の仕方や配架など図書館の環境整備に知恵を絞っていることがよく分かりました。



(グループの熱心な情報交換)

(情報交換の内容を紙に書く)



(グループの代表者の発表)



(発表を聞く中学生と先生や学校司書)



この交流会では、当日の受付や司会進行、ビデオ撮影だけでなく、ポスターや冊子の表紙デザインも、いろいろな中学校で分担していました。



(受付で資料を渡す中学生)



(司会をする中学生)



(記録用ビデオを撮影する中学生)

## 10月生まれの文学者



川北 亮司（かわきた りょうじ）と「うちゅうでいちばん」

1947年10月31日 東京都荒川区 生まれ

川北氏は東京の下町で生まれ、中学校では天文気象部に所属し、1963年都立北高等学校に入学と同時に将棋のプロ棋士を夢見て毎週日曜日、日本将棋連盟道場に朝から深夜まで入り浸りでした。翌年将棋を諦めましたが、東京五輪で日本中が沸き立つ中、1m80cmを超える長身でバレーボールに熱中し、2浪後早稲田大学第一文学部に入学しました。

大学入学後、児童文学サークル「少年文学会」（旧早大童話会）に入会したのは、浪人の時にペンフレンドから「星の王子さま」の本を勧められたことがきっかけだったそうです。

大学在学中に書いた「はらがへったら じゃんけんぽん」で日本児童文学者協会新人賞を受賞し、学生作家として新聞にも大きく掲載され、その後10年程の間に「街かどの風」など20冊近く書きました。1980年半ば、突然行方が分からなくなりましたが、1991年夢と冒険に満ちあふれた「ふたごの魔法つかい」を発表し、シリーズ化されました。

「うちゅうでいちばん」は、40年前に丹後半島の漁村の分校で出会った子どもたちをモデルにした物語です。父親がサラリーマンだった川北氏は、子どもが父親の手伝いをし、父親の働く姿が見えることが新鮮でうらやましく、そんな親子関係を描きたかったそうです。

川北氏の作品は、「マリア探偵社」シリーズや絵本「のんびり森のぞうさん」など多数あります。



乙一（おついち）（本名 安達 寛高 あだち ひろたか）と「きみにしか聞こえないCALLING YOU」

1978年10月21日 福岡県田主丸町（現・久留米市）生まれ

乙一氏は、両親と2歳上の姉がいる4人家族の長男として生まれ、1999年久留米工業高等専門学校を卒業後、豊橋技術科学大学工学部に編入学し、3年後卒業しました。

小学校5年くらいから本を読むようになりませんが、中学校の図書館には大人向けの本しかなかったため、読書意欲が沸かずゲームと漫画に偏り、一番本を読んでいなかった時期でした。

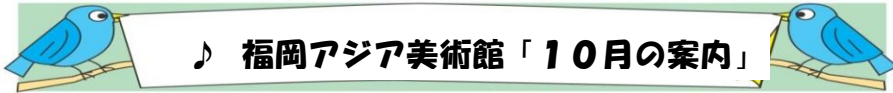
16歳の時、友人から借りたライトノベルの「スレイヤーズ」を読んだことで小説を読む楽しさを知り、それから1年半程はゲームや漫画だけでなくライトノベルを読みあさったそうです。そして、17歳の時、ゲーム本の「かまいたちの夜」を読んだことがきっかけでミステリーに熱中し、「夏と花火と私の死体」でジャンプ小説・ノンフィクション大賞を受賞し小説家デビューしました。

「きみにしか聞こえないCALLING YOU」は、友達がなく、携帯電話も持っていない女子高校生が、空想の携帯電話を通して男子高校生と心を通わせ、悲しい結末を乗り越えていく話です。

乙一氏は、山白朝子（やましろ あさこ）や中田永一（なかた えいいち）など、作品によって名前を使い分けて執筆しています。乙一という名前にした理由は、画数の多い字が嫌いなこと、ライトノベルのイラストの人には漢字二文字の人が多く、弘司（こうじ）氏の絵が好きだったことから、漢字二文字で画数少ない乙一と付けました。

乙一氏は、まずストーリー展開を決め、それにあったキャラクター設定した後、「シナリオ入門」という本で勉強した映画の脚本作りの技術（ミッドポイントといわれる物語の途中でいくつかポイントを設定して転換点を迎えるという手法）で執筆するそうです。

作品は、「GOTH リストカット事件」（本格ミステリ大賞）「ゴーストは小説家が好き」「銃とチョコレート」などあります。



\*\*\*\*\*

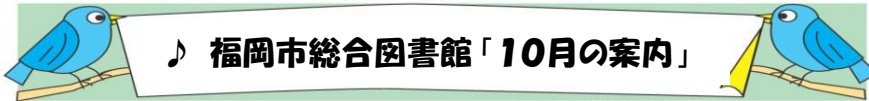


### \*アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ

8日(火), 13日(日), 22日(火), 27日(日)

・時間: 11:30~12:00, 13:00~13:30

・場所: 7階「キッズコーナー」(申し込み不要)



\*\*\*\*\*



### 毎月のおはなし会

5日(土), 6日(日), 12日(土), 13日(日)

19日(土), 20日(日), 26日(土), 27日(日)

・時間 土曜日: 5日, 12日, 19日

14:10~14:25 赤ちゃん向けおはなし会

14:30~14:50 幼児向けおはなし会

26日

14:30~15:00 幼児から小学生向けおはなし会

日曜日: 14:30~15:00 幼児向けおはなし会

15:15~15:45 小学生向けおはなし会

・場所 「こども図書館 おはなしの家」

### ☆ あとがき

中学校生徒図書委員交流会では、中学生が主体的に会場設営、当日の資料準備、受付、交流会の進行などを行っていました。

ビブリオバトルでは、お薦め本を紹介した中学1年生の出場者も、参加者からの質問に自信を持って答えている姿に感心しました。

情報交換会では、どの学校の図書委員も同じような悩みを抱えていることが分かり安心した様子があったり、新刊本やイベントの紹介に放送委員会や美術部などの力を借りていることを聞いて、「うちの学校でもやってみよう。」という声が聞こえたりするなど、とても有意義な時間になっていたと思いました。

中学校の図書館は、図書委員会の果たす役割が大きいなど改めて感じました。

発行: 福岡市教育委員会 生涯学習課

電話: 092-711-4655 FAX: 092-733-5538

## 図書館員のひみつの本棚 第161回

今月は久しぶりに絵本の紹介です。

### 『みんな なかよし けんかばし』

ジョン・オッペンハイム／作 アリキ／絵 みき たく／訳 童話館出版  
2016年 1400円（税抜）

#### <お勧め年齢>

乳幼児☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆ 小高学年☆ 中学生——  
高校—— 一般 ——

（☆が多い年齢の子どもにお勧めです。）

#### <本の紹介>

川をはさんで、東側と西側がいがみあっている村の人達。いつも、村にたった一本かかっている橋の上で、大人も子どもも悪口やげんこつの大喧嘩。

ところがある日、嵐で橋が流されてしまう。

村には、お医者も、仕立て屋も、パン屋も、靴屋も、お百姓も、みんな一軒だけ。

最初は西の人も東の人もお互いにせいせいしていたけれど、そのうち困ったことになってきた。

#### <子どもに手渡す時のポイント>

破天荒ないがみ合いと、ちょっと間の抜けた展開が大笑いの絵本です。

橋が流された後、「でも、おいしゃさんはどこ？」「川のむこう」、「でも、おひやくしょうはどこ？」「川のむこう」と繰り返される場所は、ぜひ子どもに「〇〇はどこ？」と問いかけてあげてください。

絵はあまり遠目がきかない場面もあるので、読み聞かせというよりも、一緒に読みながら楽しむほうがよいと思います。

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。

